

翻訳 マックス・ノイブルガー著、 自然治癒力学説史, 1926

—第2章 16, 17世紀における自然治癒力説(上)—

細見博志

KEY WORDS

natura (physis, Natur, nature), vis medicatrix naturae (Heilkraft der Natur, healing power of nature), Hippokrates, Paracelsus, van Helmont

【凡例 この翻訳はウィーン大学医学史教授、医学・哲学博士、マックス・ノイブルガー（1868-1955）著、時代の変遷における自然治癒力説, 1926 (Die Lehre von der Heilkraft der Natur im Wandel der Zeiten, 1926, Verlag von Ferdinand Enke/ Stuttgart, von Dr. med. et phil. Max Neuburger, o. ö. Professor für Geschichte der Medizin an der Universität in Wien), の第2章 Die Lehre von der Heilkraft der Natur im 16. und 17. Jahrhundert の前半, 原著26-40頁, を訳出したものである。ここでは主として16世紀前半のドイツのパラケルススと17世紀前半のベルギーのヘルモントを論じている。次号に掲載予定の第2章後半, 原著41-58頁, は, 17世紀中葉からのイギリスのシデナム, オランダ学派のシルヴィウス, イギリスのボイルに言及している。序章, 第1章は先号の『金沢大学つるま保健学会誌』(Vol. 25, No.1, 2001, 7-22頁)に掲載した。原著は序章と本文全4章, 索引4頁を含んで212頁であり, 今回訳出したのは原著頁数で全体の12分の1ほどにあたる。

原文ゲシュェルト(隔字体)は<…>, 原文引用符は「…」で示した。地の文はドイツ語であり, 引用でギリシャ語は[G], ラテン語は[L], 英語は[E]で, 原著頁数は[S…]として, 示した。この章でのラテン語引用文は膨大で, 正確を期するため, まずラテン語引用文をそのまま掲載し, 日本語訳はそのあとに付した。その場合は[L]を省略した。原注は本文の該当する箇所*で示し, その段落の切れ目に小活字で挿入し, その後一行開けて次の段落を開始した。訳者の補足と註は, […]で括って本文中に繰り込んだ。

なお, ヒポクラテスに由来する *krisis*, *Kritik* とは, 病気が高じた状態で, その意味で「危機」である。そのあと高熱が急に下がって快癒することもあるが, 場合によっては逆にそのまま不癒の人となることもある。それをここでは習慣に従って「分利」と訳した。

全体にわたり, 元日本女子体育大学教授の嘉野垣道先生の校閲を受けた。特にラテン語の引用に関しては, 一字一句を入れていただいた。それでも多くの理解不能箇所が残りを, また多くの誤りが潜んでいることであろう。識者のご指摘を

乞う次第である。】

Homo naturae minsiter et interpres, tantum facit et intelligit, quantum de naturae ordine re vel mente observaverit nec amplius scit aut potest. Bacon. (人間は自然の召使いであり仲介者である, 自然の秩序について事実と精神を用いて観察したことだけをなし理解するのであって, それ以上のことは知らないしできもしない。—ベーコン [フランシス・ベーコン, 1561-1626, 『ノウム・オルガヌム』(1620)中の「自然の解明と人間の支配についてのアフォリズム」第1巻, 1])

Plura in antiquorum scriptis latent, quae negliguntur, quia a paucis veteres leguntur. Th. Bartholinus. (古代の人々の書物の中に多くのものがなおざりにされたまま潜んでいる, というのも僅かの人にしか先人たちは読まれないからである。—Th.バルトリヌス [バルトリンともいう。デンマークの解剖学者, リンパ管の発見で有名, 1616-80])

スコラ主義とアラビア主義の東縛からの解放や古代医学文献の再生がどんなに意義深いものであったとしても, それだけでは, 自然治癒過程 (natürlicher Heilprozeß) の理解が硬化しているのを流動化させ, 治療に効果あらしめるようにするには, まだ不十分であった。当時ももとの形で再建されたガレノス主義は, 真に新しい考え方で視野を拡大した, とはとてとも言えなかった。病理学はせいぜい個々の点で新しくなっただけであり, 気質理論や体液理論 (Qualitäten- und Säfteorie) に基づいていた患者の治療は, とめどのない多薬投与の様相を呈していた。ヒポクラテス全集の文献は16世紀の学者たちの努力のおかげで, 正確に復刻されて読めるようになったが, このコス学派の巨匠の精神と彼の自然療法

(Physiatrie) は、当時の多くの医者にとってまだ馴染みのあるものではなかった。「分利」(Krisen) や分利による排泄という形での自然治癒力 (Naturheilskraft) の現れを観察すれば、それが治療の基本となる、と言えそうなものだが、しかし医者の治療指針の数は極めて多く、医術によって自然を「支える」適応例はとても広く設定されていたので、病気のときに生体がいかに自らを管理するか、ということ澄んだ眼でとらえるには至らなかった。生体の自己管理の知識は、せいぜいは疫病期に、見捨てられた患者が命辛々生き返った経験や、不治とみなされていた患者が予想もかけず治った体験によってもたらされた、ほとんど驚異の奇跡と言ってもよい知識である。自然治癒力の支配を公正に理解することは、おそらく極めて僅かの医者だけが、しかもせいぜい例外的に、なしたことであった。

[S. 27] 16世紀前半の医学文献では、「自然は病気の医者である」とか「医者は自然の召使である」などの言葉*が、様々な解釈を受けて再三再四浮上した。しかし単なるキャッチフレーズを越えて、心底から自然への確信に貫かれて、自分で観察し自分で経験して自然治癒過程を全体として把握したのは、当時の偉大な疾風怒濤の人<パラケルスス> (Paracelsus) [ルネッサンス期ドイツの革命的な錬金術師の医化学者にして哲学者、1493-1541] だけであった。彼は近世初頭、燃えるような、今日なお説得力を持つような言葉で、当時あまりに軽視されていた自然治癒力の重要性を主張した最初の人であった。互いに遠く離れて屹立している山の嶺同士が挨拶を交わし合うように、[ヒポクラテスとパラケルススという] 精神界の巨人たちが時代の壁を速く越えて手を交わし合ったのであった。それゆえホーエンハイム [パラケルススの本名] はヒポクラテスのみを、医学の過去に対する全面否定的判断の例外としたのである、というものこそコス島出身の巨匠医こそ自然の治癒力を全面的に評価し、患者のベッドで働いている自然治癒力に、それにふさわしい権利を得させようと努めたからである。

* Naturam esse observandam. (自然は尊敬するべきなり)
Naturae subveniendum. (自然に助力するべきなり)
Naturae ministrandum. (自然に仕えるべきなり) Quo
Natura vergat eo ducendum. (自然が向かうところへ導くべし)

月並な診療にみられる極端な薬物乱用や、とりわけ外科の領域で流布していた乱行に対して、パラケルススは断固として抗議し、自ら自然治癒力のため

の戦いにおける警告者となった。しかし彼の書物に見られるような、それほど視野の広さと洞察の深さでこの問題を極めるためには、たぐいまれな観察力、どこまでも遡れる見識、生命のただ中からくみ取ることのできる、包括的で真に哲学的なものの見方、などが必要である。<パラケルススにとって生体は凝固しておらず、常に上や下へと流動する生成の波に浸され、耐えず繰り返される産出と破壊の過程に曝されている。生体は合目的性によって貫かれた全体性である、もっともその構成部分はある程度まで独立性を保持している>。生命を形づくる力動的化学的な過程の基本原則は、肉体の [中にある] 錬金術師 (Alchymist)、つまり「始源者」(Archeus) [体内自然のこと。原力とも訳す。肉体的過程を統制し、支配する精神力を示す用語として、最初に Valentine が、次いで Paracelsus と van Helmont が用いた。ステッドマン医学大辞典、第5版、参照] である。この始源者はまた、ヒポクラテスの「自然」(Physis) に応じ、不良有機体 (Afterorganismen) として動的に構想された病気に抗して、内なる医者として対抗的に働くものである。<寄生体として考えられた病気と「始源者」との間に戦いの火の手が燃え上がり、その戦いに固有の生命を付与された身体部分がすべて加わる>。「始源者」の勝利が治癒であり、病的過程における不良生命体の勝利が死である。<健康体から発し、無数の協調しあう諸部分からなる生体の反発力が、唯一治癒を可能とするものである>。[S. 28] 自然による救済のみで十分なときもあれば、自然が動揺し、目的に到達しないときもある。医者の使命は、もし必要ならば、自然の治癒努力を支えることであり、その方法には、時には衛生的、食餌療法的なやり方があり、時には病気の「種」(Samen) に抗する「秘薬」(Arkanen) 療法がある。<医者の技は自然療法と秘薬治療からなるが、その技によって自然が働くのに好都合な条件が作り出され、自然の潜在的な治癒力が覚醒され、生体における健康な部分の反発が活気づけられるのであり、また薬剤によってこのような反発に類似する過程を引き出さねばならない>。自然が何事もしなしたわらず、生体になお存在している健康な部分の反発が全くないときには、医者も根付いた病毒を癒すことはできない。特に注目すべきことは、パラケルススは傷の治療で<自然治癒力>を弁護し、当時の乱診乱療 (Polypragmasie) を彼特有のやり方で菌に衣着せず批判し、<外部から有害な影響が加わることを防ぎ>、<傷を清潔に保つ>ことに、医者の唯一の仕

事を認めた：「そのつど自然は香膏（Balsam）を携え、それによって傷は癒える、今後必要なのは傷を清潔に保つことだ」。<傷の癒える過程は自然の業そのものである>。

ここでパラケルスの著作からいくつかの核となる文章を引用しよう：

『医師迷路』（Labyrinthus Medicorum）、第7章。人はあらゆる病気をしょい込み、それに服している、母胎から出てくるやいなやそうであり、いやむしろ母胎の中でそうなのだ。もしも内なる医者（der inwendige Arzt）がいなければ、そもそも人は命をもって、健康をもって、生まれることはなかったであろう。…自然から人はあらゆる病気に抗する薬をもたらしている。人は自然から健康を破壊するものをももらうように、健康を保持するものをももらう。今やそのことから帰結するのは、破壊者は徹底的に破壊と腐敗へと働き、人を殺戮しようとする。同様に自然という保持者は丈夫で熱心である。一方が破壊するものを生来の医者（der angeborene Arzt）は再建する。

かくて人は認識し理解すべきである、神が人に自然という医者と自然という薬を、つまり〔それこそ真の〕薬局と医者を、与え生みだしてくれなかったら、外なる医者にとって命は虚しいものとなるだろう（des äußeren Arztes halber bliebe nichts beim Leben）、と。

我は汝らに、もはや薬もなく医者もいないかのように、告げるのは、そのように考えるからではなく、むしろ次のようにである。人は倒れて死ぬように生まれている（zum Umfallen geboren）。起きあがらせる医者を二種、自然の光のうちに人はもっている。一つは内なる医者であり、内なる薬と共に受胎と同時に人に生まれ与えられる。しかしその医者にも手に余り、倒れて死ぬなら、破壊者（der Destructor）が増え、凱歌を奏する。〔S. 29〕保存者（der Conservator）は前もって定められたところまで後退する。保存者がそのように後退し、破壊者が増大するところでは、外なる医者（der auswendige Arzt）が見て取り、破壊者を追い出し凌駕し、保存者が開始した所にまで追跡すべきである。また保存者が終えたところで〔外なる医者は〕始めるべきである。…生来の医者が働かなくなり、いたずらにもがき、疲れたときに、外なる医者は働き始めるのであり、内

なる医者が外なる医者に任務を命じるのである。

<オプス・パラミルム>（Opus Paramirum）、第2巻第2章。<かくて人は自分自身の医者である>。というの人もが自然の働きを手伝うにつれて、自然は人に必需品を与え、全身の構造に応じて楽園（Garten）〔?〕を与える。というのも物事をすべて根底まで考え抜くならば、<われわれの本来の自然>はわれわれの医者そのものであり、つまり自然はそれが必要とするものを自らのうちにもっている。傷について外側から観察せよ。傷には何が欠けているか？ 肉以外の何ものでもない。<その肉は内から生じなければならず、外から内に入り込むのではない>。それゆえ傷の薬はひたすら防衛的なもの（ein Defensiv）で、自然は外からの偶然に左右されず、自然の作用を邪魔するものはない。<かくて自然は自らを癒し、平坦にし、自らを秩序付け>、ついで外科を練達の医者に教示す。というのも蜜罍（Mumia）〔ベルジャ語の mumiya に由来し、ミイラを保存するために用いられたことから、後にミイラそのものを意味するようになった〕は<人そのもの>であり、<傷を癒す>香膏であるが、乳香（Mastix）や樹脂（Gummi）、密陀僧（Glatt）〔酸化鉛〕などは一片の肉を生むものではなく、自然を保護して、自然が作用するのを促進させるものである。したがって病気の体においても、自然は〔乳香などで〕保護されるものではあるが、それでもあらゆる病気を癒すのは自然である。かくて自然は、病気を癒す方法を知っている。医者はそれを知らない場合がある、したがって医者はむしろ自然を保護する存在である。かくて自然においては、科学において明らかとなったのと同じ位多くの特性（propriates）がある。自然は自らの内にそれらを産み出す。われわれは学問からそれを学ぶ。自然ができることをわれわれはなすだけのことである。

<体に病気があれば、体の中のすべての部分は病気に抗して戦わねばならない。文字通りすべての部分であって、個々の部分ではない>。かくて病気はそれらすべての部分の死である。そのことを自然は知っており、それゆえ自然は病気に抗して、できる限りのあらゆる力を用いて戦う。

『大外科学 I』（Große Wundarznei）第2章。…脚に自然に備わる香膏（Balsam）が脚の骨折を癒し、肉に自然に備わる香膏が肉を癒す。したがって体の

あらゆる部分について、どの部分も自らの内に癒す力を持っているということが分かる。かくて自然は自分の医者を自分の肢体にもっており、その医者が傷ついたところを癒してくれる。＜かくてどの外科医も知っていなければならないのは、癒すのは自分ではなく、体の中の香膏が癒すのだ、ということである＞。しかし医者が、治すのは自分であると思いが違っているなら、それは道に迷っているのであり、自らの力を知らないのである。外科医や外科術が何が得意で何の役に立つのか、たとえば、汝外科医が傷ついた自然を思むべき敵から保護し、外敵が自然の香膏をはねのけたり、毒を与えて駄目にしたりすることのないようにすることである。そのことによつて自然がその香膏の力と作用を、医者の助勢を受けて、保持するようになる。かくて明らかなことであるが、傷が露呈し何の防御もなされなければ、自然もその働きを成就することは全くできなくなる。それゆえよく自然を守ることでできる人は良き外科医である。したがって外科医は薬によって、自然に抗する外敵から自然を守る。[S. 30] そして自然が病むときには、外敵はさらなる病を導入しようとする。そのような外敵や病気の力を医者は薬で追い出し、自然はその香膏でうまくやっていくことができる。

パラケルススが展開したような見方に対する同時代人の理解は、極めて不十分なものであった*。彼らにとってはむしろパリ大学教授のフェルネル(Jean Fernel) [ルネッサンス期フランスを代表する医学者、1497-1558] の見解の方がはるかに明晰で伝統的な治療法と一致しているように思われた。彼は当時の最大の権威者の一人であり、動揺しつつある古代医術の体系をガレノス主義のかなり大幅な変革によって、崩壊から救い出そうとしてそれに成功した。フェルネルもく自然治癒努力を支持し模倣すること>を<医業の原則>としているし、自然に逆らうすべての療法を退けたが**、それでも<医術による救済の方をより高くはるかに包括的である>と評価することを、避けることはできなかった。医者には単なる「自然の召使い」(minister naturae) という控えめな役割をあてがうにとどまらず、「援助者」(adjutor) という立場、さらには「主要な製作者」(opifex primarius) という立場をあてがうに至った。<自然の業が医術の業によって凌駕されなかったとするならば、一体何世代にもわたって払ってきた様々な努力は何のためであったということになるのであろうか?>。軽病は自然が単独で癒すこ

とができるのはもちろんであるが、重病では医術の助けが不可欠なのである。

* 漸く数世紀後になって、パラケルススの見解の価値を人は知るに至ったし、後世の著作家たちにおいて一ならず彼の見解にお目にかかることになる。

** *Medicinae leges Naturae legibus debent esse consentaneae. Et felix medicatio, cui adjuatrix Natura succurrit, irrita vero, quae repugnante Natura tentatur.* (医学の規則は自然の規則に一致しなければならない。治療は、援助者である自然に助けられるときにはうまくいくが、自然に反して行われる治療は失敗する。)

<therapeutices universalis>, seu medendi rationis libri septem. Par. 1554, Lib. I, cap. I : *Medicus porro remedia confert, non solum ut naturae minister, sed interdum ut adiutor, interdum etiam ut <opifex primarius. Est enim in plerisque ars natura praestantior : ut quae non solum naturam imitatur, sed et modo adjuvat, modo etiam superat, ac saepe medendo plus quam natura gerit>. Etenim humanae vitae moderatrix natura, cuncta quam optime potest administrat, idque assidue molitur, ut corpus in extremam usque vitae periodum integra, aut quam saltem ortu accepit, sanitate conservet : et si qua id forte extrinsecus injuria lacessitur, eam pro viribus propulset. Quaecunque autem vel tuenda sanitate vel morbis profligandis recte illa gerit, imitatur consilioque dirigit medicina, unam sanitatem scopum agendorum sibi proponens. Nonnunquam et morbi pervicaciae impeditae vel imbecillitate laboranti naturae, adjuatrix medicina fert opem et manca inchoataque munera explet et perficit, diuturnosque morbos plerumque breviores facit. Quinetiam naturam interdum ea superat. <Siquidem luxatos artus reponit, vulnerisque disjuncta labra adducit et in aliis non paucis praecipuam curationis partem administrat, quam minime natura aggredi potest. Quorsum quaeso constituta haec esset tot tantisque majorum vigiliis, nisi majus quiddam et excellentius quam natura praestaret?>...Leviore morbos sola natura plerumque sanat, idque per se nullo artis subsidio : graviore saepius arte indigent, quos non ipsa per se, sed adhibita curatione sanat : nam quae arte fit sanatio, non nisi curatione perficitur. Est autem curatio recta atque conveniens remediorum usurpatio....* (『治療学総論』, ないしは治療論書全七巻。パリ, 1554, 第一巻第一章。医者はまた治療を施すに際して、単に

自然の召使いとしてだけでなく、時に援助者として、時に<主要な制作者>としても、ふるまう。<というのも医術は、たいてい自然よりもまさっているからである。医術は自然を模倣するだけでなく、時には助け、時には凌駕し、さらに癒しにおいてしばしば自然以上に働らく>。確かに自然は人命の指揮官であり、全身をできる限りよく管理し、体を絶えず動かし、その結果、人生の最後に至るまで、あるいは少なくとも生まれた時受けた以上に、体は健康を保つ。そしてたとえ体が外部からたまたま害を受けたら、その害を力の限り撃退するであろう。しかし健康を守ったり病気を撲滅したりして正しくふるまう自然を、医術は模倣しその助言によって処方する、なされるべき目的の内唯一のものすなわち健康を目指しつつ。度々病気がやっかいでしつこく自然が無力を託っているときは、援助者である医術は援助し、不足し未完のままの仕事を果たし完成させ、長患いをたいていもっと短くする。医術はときに自然を凌駕する。<[医術が]はずれた関節をもどしたり、傷を受けて裂けた唇をあわせたり、他の少なからざる特殊な治療の場合を管理するが、そうしたことは自然は少しもなすことができない。この医術が先人のかくも多くの勤勉によって成立してきたのかをなぜ問う必要があるだろうか、何かが自然よりもより偉大で傑出していないならば?>…より軽い病気はたいてい自然だけで癒し、それ自体医術のどんな助けもいらぬ。より重い病気はしばしば医術を必要とする、重病は自然だけで治るのではなく、手当てが付け加わって直る。つまり医術による治療は、手当てによってのみ完成されるのである。手当てとは薬剤の正しい適当な使用のことである…。

[S. 31] 16世紀後半になって観察力が增大し、判断力が独立性を増すにつれて、自然治癒力の賛美者の数は増加した*。その中にはヒポクラテスの賛美者（フーリエ Houlier, デュッレ Duret, バイユー Baillou [フェルネルの弟子で疫学者、1538-1616]）、ガレノスの熱心な支持者や批判者、あるいはバルケルス主義者がいた。彼らの見解の根拠は実に様々であった。ある時には権威主義的言明が、ある時には自らの経験が、中心をなしていた。特にパラケルス主義者の場合は、自然哲学に依拠する考察がしばしば決定的に重要となった。

* ドイツ人の中では、第一人者の一人としてランゲ (Joh. Lange) [ヒポクラテス流の保存療法に与し、瀉血を重視しなかった、1485-1565] をあげることができる。彼は著書 *Miscell. curios* で次のように述べている：
natura non cooperante medicus cuncta incassum molitur.
 (自然が協力しなければ医者のなす事はすべて無益となる)

ここでは二三の例を挙げるにとどめなければならない。

パローニウス (バイユー) (Ballonius [Baillou]) はヒポクラテスを模範にしてまとめた病状記録集で、発熱、分利 [krisis]、運動の巻 *Partium ἐφοδοι, ῥοπαί, καὶ, κινήσεις* で、次のように書いている：
seu motus naturales admirabiles sunt... Nunquid admirabiles sunt naturae motus et inclinationes et transpositiones et metastases? (*Epid. et ephemerid. lib. I, pag. 260, 261*) (つまり自然な運動は驚くべきものである。…自然の運動にしる傾向にしる置換にしる転移にしるいづれも驚くべきものではないだろうか? (疫病とメモ、第2巻、260, 261頁))。

ワレリオーラ (Valleriola) は後にシュタール [ハレ大学教授、1660-1734] が好んで根拠として引用した人であるが、ガレノスの著書『医学の体系について』*de constitut. art. med.* の注釈書と著書『共通の座』全3巻で自然治癒力を詳しく述べる対象としている。後者において自然について次のように述べている：
providam vero et sollicitam indicant ea, quae in morbis gravissimis et exitialibus natura, ut servetur aeger, molitur. Siquidem adversus morbificam causam impetu valido insurgens, et decretiora excretionisque vehementes molitur et concoctione, discretionem, tandemque vacatione a lethalibus morbis aegrum saepe liberat. (*Loci medicinae communes, Lib. I, cap. 5*) (極めて重く恐るべき病に際して、病人を救うために自然が引き起こすものは、まことに先見の明があり注意深いものである。病因に抗して、激しい攻撃でもって [自然が] 立ち上がり、より決定的な事態である激しい排泄を引き起こすときには、消化、区別、おまけに、空虚化、によって [自然は] 死病から患者を解放する (『医学の共通の座』、第1巻第5章。)) ワレリオーラの病状観察記録は重要である、というのもそこには、ただただ生体の自己治療によって驚くべき具合に病気が治ってしまった症例が語られているからである。Lib. I, obs. 4 : *De pleuritide incocta et sine sputo, aegro a medicis pro deplorato habito: sanatur tamen fluxu alvi oborto praeter omnium spem.* (第1巻観察4。非煮熟型 [?])

胸膜炎にかかっても喀痰がなく、医者たちによって「見放された」患者について。しかしあらゆる予想にもかかわらず生じた下腹部の流動〔下痢〕によって「その患者は」健康になる。）Lib. II, obs. 6. : De curatione febris continentis periculosissimae in puella viij. ann., quae [iviの誤植] naturae, nullis artis praesidiis, cum deploratae valetudinis, ob morbi et symptomatum saevitiam, habita esset, oborto alvi fluxu liberatur. (第2巻観察6. 8歳の少女における極めて危険な間断なき発熱の治療について、その少女は、病状の激しさのために悲しむべき不健康状態であったが、自然の力で、いかなる医術の手段も用いずに、生じた下痢によって救われた。) Lib. IV, obs. 1. De pleurite sinistri lateris gravi in muliere praegnanate, sine ullis prope medicamentis, sed solo naturae ductu infra quartum diem sanata. (第4巻観察1. 妊婦における左肺における重い肋膜炎について、ほとんど何の薬も用いずに、自然の導きだけで、四日後に病気が癒えた。) Lib. VI, obs. 7. Medicus Lusitanus septuagenarius ex diuturna febre in lethargum incidens, pro deplorato a medicis relinquitur triduum totum : reviscit tamen paulatim et vi naturae tacite operantis integrae sanitati restitutus fuit. (第6巻観察7. 医師ルシターヌスは70歳にして長時間の発熱から嗜眠状態に陥り、この哀れな人に医者たちは丸三日間見放してしまっただけ、しかし次第に回復して、まったく健康に向けて密かに働く自然の力で、元気になった。) ——ワレリオーラにとっては自然はもって生まれた体熱 (calor nativus) と同一であり、主としてこの体熱に治癒力は帰せられる (morborum curationes in primis nativo calori nostro esse merito adscribendas 病気の治療は主としてわれわれの生まれつきの体熱に正当にも帰せられる)。

[S. 32] 観察をもとにして何度も彼は古来からの次の命題に立ち戻っている : Natura repugnante sunt omnia vana. (自然に反すれば一切が虚しい。) 自然は病気の真の癒し手であり、自然の道を辿ることは誠実な医者への課題である。とはいえ彼によれば、人の限られた認識能力は自然の知恵に凌駕されている。

トリンカウェラ (Trincavella)。Natura suo pte instituto et ut philosophi docent <ab intelligentia non errante directa> (哲学者たちが知性によって教授するように、自然は自らの過たない原理で行う)。なにかならず彼は「駆除力」(facultas expultrix)の治癒作用を賞賛した (『医学書簡集』Epist. medicinales, Ep. 13.)

カエサルピーヌス (Caesalpinus) [イタリア名、アンドレア・チェザルピーノ、植物学者、解剖学者、1519 - 1603]。Remedia, ubi natura non adjuvet, inutilia esse (自然が助けないところでは薬は役に立たない) (Quaest. medicar. Lib. I, qu. 3)。治療はすべて、外科的な措置であっても、成功するためには (生来の体熱 calidum innatum という) 自然の作用を前提する。

メルクリアーリス (Mercurialis) の著書 (『小児の病気について』De morbus puerorum) のある個所は興味深い。そこでは苦痛を伴う乳歯の生えかけが、病気とみなすべきかどうかすでに疑問に付されている。Compertum enim est, naturam non intendere morbos neque facere, sed dentitio est purum naturae opus, quare non videtur morbus esse appellanda. (確かなことは、自然は病気を意図したり作ったりはしない、歯が生えるのは自然の純然たる業であるということであり、どうして病気といわれるべきなのかは理解しがたい。)

ワレシウス (Valesius) は『流行病に関するヒポクラテスの書物への註釈』(Commentaria in libros Hippocratis de morbis popularibus) において、「自然は病気の医者である」(Morborum naturae medicatrices) という命題を詳しく論じ、異論に対処しようとしている。 : Certe medicina est morborum medicatrix, siqui dem est ars medendi et medicus curat morbos. Verum natura haec facit multo magis, quia sua natura est principium et causa rebus omnibus suae conservationis, morbus autem est affectio corruptiva, ac proinde necesse est, naturam omni morbo repugnare, ac si possit etiam vincere squidem est, esse morborum medicatricem. Ars cum recte operatur, juvat naturam adversus morbos... <Ars multa facit sola, perficit tamen nihil, neque ullus morbus potest opera solius artis persanari>. Nam suturae non sanabunt vulnera, nisi natura agglutinet, neque repositio ossis erit satis, nisi natura firmet articulum ligamentio, neque scissio conferet, nisi natura pellat malum quod suberat, ut pus aut os cariosum. Neque carnem exstirpari erit satis, nisi desinat natura repugnare et cicatricem producat. (確かに医術は病気を癒すものである、というのも医術と医者が病気を治すからである。しかし自らの自然は遙かに大きな業をなす、というのもこの自然は、万物を保全する基礎であり原因であるからであり、これに対して病気は腐敗作用を及ぼす、したがって

自然はあらゆる病気に抵抗し、さらにそれにうち勝つことが可能ならば、病気の治療者であるはずである。医術が正しく働くためには、[医術は] 病気に抗して自然を支える。…<医術のみでも多くをなすが、しかし何事も完成せず、病気は一つとして、医術のみの業によって癒されることはあり得ない>。なぜなら、自然が膠着させなければ縫合も傷を癒すことはないであろうし、自然が靭帯で関節を形作らなければ骨折の復旧も適当にならず、膿や骨を腐らせるような害毒が潜伏しているのを、自然が駆除するのでなければ、骨折も癒合しない。もしも自然が抵抗をやめ傷の癒合をつくらなければ、肉の除去も十分とはならない。) ——<新たに併発した病気が時に既存の病気を癒し、ある種の治療上の措置(特に外科的な措置)が病気の定着を意味することがある、ということは必ずしも否定しないが、他方でワレシウスが断固たる態度ではしないと警告するのは、人為的に熱や他の病状を作り出して、自然を性急に模倣することである。> : Cum enim medicum imitatore naturae appellamus, non ita intelligimus, ut nihil medico liceat tentare, quod natura non faciat, natura enim cum non ratiocinatur, nihil tentat nisi quod per se fertur in bonum finem; tamen medicus rationalis multa facit per se mala, quae conjectat ex accidenti futura bona. Intelligimus tamen medicum esse naturae imitorem, quia debet facere, quae videt facere Naturam, quamquam neque illa quidem semper, sed cum natura commode operabitur. Cum enim sit aloga, ut nihil faciat per accidens bonum, sed per se, ita facit multa per accidens mala, et Medicus tenetur facere, quae videt profutura, etsi prosint per accidens, ita tenetur deviare, quae per accidens nocent, etsi per se ferantur in bonum. (Controversiarum philos. et medic. lib. VIII, cap. 10) (医者を自然の模倣者と私たちが呼ぶ時、自然が行わないようなことは何一つとして医者がなしてはならない、という意味ではない。つまり、自然は熟考しないので、それ自体でよい結末になるもの以外の何物も自然はなさないのである。しかし分別ある医者はそれ自体で悪しき多くのことをなすが、それらは偶然にもよき結果をひきおこすのである。つまり医者が自然の模倣者であると私たちが理解しているのは、自然がなしていると医者が理解していることを、医者はなさなければならぬからだ。もっとも、なさねばならないのは、自然が常に行うのではなく、適宜に遂行していることではあるが。そ

れゆえ偶然にも良きことを一つとしてなさないのは愚かしいことであるが、他方で、見た目には役に立つように見えるけれども、しかし役に立つのは偶然であったり、害になるのは偶然であるがそれ自体良きものであるような、偶然にも多くの悪しきこと自体を、医者はなさねばならない。(『哲学と医学との争い』、第8巻第10章))

パラケルスス主義者たちはお互い同士おおよそ足まみはそろっていなかったが、ヒポクラテス・ガレノス流の原則の理解には二重の意味で反対した。一つは、<病気の経過は、生体の自己規制よりもむしろ、種(Samen)から生じた病原体の生命過程に左右される>、[というパラケルスス主義者の主張]であり、もう一つは、自然療法に代わるに、病因に働きかける秘薬療法を用いる、という[パラケルスス主義者の]療法である。[S. 33] 先の反対に与して、例えばセウェリーヌス(Severinus)は、自然治癒力の主要な道具である「駆除力」(facultas expultrix)に卓越した意義を認める見解を退けた(原著18頁参照)。

パラケルスス主義者の治療においては、自然治癒力が評価されていたが、その場合しばしば、自然治癒力という言葉には<全>自然(Gesamtnatur)の作用力が、したがって薬の力も、含意されていた。力動的にとらえられた秘薬の効果も、生体の<不思議な>自己救済力も、例えばオスヴァルト・クロル(Oswald Croll)のBasilica chymicaの序文(117頁以降)では、自然治癒作用が話題となっているときには、共に含意されていた。: Solae remediorum <Natura>, seu <δυνάμεις dunameis Hippocraticae morborum sunt medicatrices, medicus vero minister>. Et haec eadem <Natura>... quae interdum miracula edit, medicorum ope frustra implorata, qui magno nominis sui opprobrio et artis medicae dedecore nimis tempestive conclamanda aegrotantem suis prognosticis reliquerant, <corporis humani proprius sibimet est medicus, qui ab extrinseco medico nil aliud requirit praeter instaurationem, aut>, ut vulgo loquuntur, <fortificationem>... Atque ita Naturam habemus non modo sociam, sed amicam et officiosam adjutricem, siquidem illa sola est genuina medicatrix omnium morborum... Primum movens omnis curationis, quippe absque cujus robore vel vigore omnis medicina inutilis est atque frustranea, Natura conservata in sui temperatura in se ipsa est medicina et suis infirmitatibus ipsa medetur per innatam mumiam, et ubi ipsa interna Natura recusat esse

medicina, ibi omnes morbi sunt lethales... Non enim medicus est, qui morbus profligat, sed natura ipsa (quae est interna mumia, seu balsamum internum) manum sibi ipsi adversum omne expellit, si deficientibus propriis viribus eius internis, externis viribus illi subveniatur a medico suo ministro, <quamvis saepe optimum medicamentum sit, nullum adhibere medicamentum et operationem soli Archaeo seu arti Naturae committere. Interni enim corporis Natura plures morbos pellit quam medicus cum sua medicina>. (医療の<自然(本性)そのもの、つまり病氣に対してヒポクラテスが用いた力(dynamis)、こそが医療であり、医者はまさしく従者である>。同時にこの<自然>は…時に不思議な業を引き起こし、医者たちの力で求めても無駄であり、医者たちは彼らの名前の大いなる恥辱や、医術の極めて好時期に呼び出された不名誉のうちに、彼らの予診に病人を委ねる。<人体にとって特有なのはそれ自身が医者であるということであり、外からの医者に、更新することを除いて、つまり一般的な言い方をすれば、強化することを除いて、他に他に何もしてもらする必要はない>。…あらゆる治療を最初に動かすもの(第一の動者)——その力とエネルギーなしにはどんな薬も役に立たず空しいのだが——すなわちそれ自らのうちにその度合いに応じて保存された<自然>が薬なのであって、それ自ら自らの弱っている部分をもともと生まれ持っている蜜蝋(mumia)によって癒すのであり、そしてこの内なる自然が薬であることを拒むときは、あらゆる病が致命的である…。まず第一にあらゆる治療を行い、治療の確かさや熱意がなければあらゆる治療は役に立たず無駄であり、適度に保存されるべき自然はそれ自体薬であり、自ら脆弱なときには生来の熱で自らを癒し、内的な自然が薬であることを拒否するときには、病はすべて致死である。…というのは病を制圧するのは医者ではなく、自然そのもの(すなわち内なる蜜蝋あるいは内なる香膏)が自らのために全てに抗して手を払いのけるのであって、その内なる固有の力に欠けるところがあれば、その召使である医者が外なる力でそれを助けるのである。<しばしば最善の医療は、いかなる医療や処方も用いず、ただ始源者(アルケウス)[体内自然]すなわち自然の業にゆだねることなのだが。というの内なる身体は自然は、薬を用いる医者よりより多くの病を駆逐するからである>。

17世紀初頭の医学文献からは、特にヘンドリック・

スメット(Hendrik Smet)のある小論文と傑出したカスバル・ホーフマン(Caspar Hofmann)[1572-1648]の諸命題が取り上げるに値する。それらは自然治癒と医術の成果をよりはっきりと峻別しようとしており、ヒポクラテスの「病を癒すのは自然である」という言葉に潜む曖昧さを、豊かな経験と周到な批判力によって除去しようとしている。スメットの達した結論は、病氣の中には自然によってのみ癒されるものもあれば、医者業によってのみ癒されるものもあり、三つ目には、自然救済と医術救済の協力を必要とするものもある、というものである。結局のところ医者業の能力も生体の自己救済力も対応できないような病氣は、無視される。[S. 34] 診察に際してスメットは病理学的全領域を渉猟し、医者業に自然治癒によりも大きな比重を置いた。<ホーフマン>は、ある種の病氣は自然によってのみ癒され、別の病氣は医者業と自然の助けを必要とし、さらに残る病氣は自然によっても医者によっても癒されない、という考えを主張した。実際上彼によれば、医者業の助けとは自然の治癒過程を支えるという意義を持つものである。彼によれば、主として待機的な(exspektativ)治療法は積極的なそれよりも危険は少ない。潤沢な薬剤投与と癒し手としての自然の理論的承認とが結びついたのがガレノス主義であるが、そのガレノス主義にもっとも近いのが学識ある<ゼンネルト>(Sennert)[ヴィッテンベルクの医学教授、パラケルススとガレノス医学との調和をはかった、1572-1637]である。

<スメチウス>(Smetius)(スメット)の既に1579年にまとめられた論文は、ずっと後に彼の『論集』(Francof. 1611)において刊行された(第7巻, 第1書簡)。その論文はロストックの教授ブルカエウス(Henr. Brucaeus)への書簡という形で再現されている。ブルカエウスの返事(前掲書第2書簡, 自然は病氣の医者である、というかのヒポクラテスの箴言に関する小論文の評価 Censura de Commentariolo super aphoris. illo Hippocrat. Naturae morborum medicae)によってはっきり分かることは、ブルカエウスはその内容に完全に納得しておらず、むしろなぜ自然は病氣の医者であり、医者は[自然の]召使であるのか(quomodo naturae morborum medicae, et medicus minister), の証明を望んでいたのではないか、ということだ。健康に支障がある場合の自然の責任(de naturae officio in sanitatis negotio)に関する<ホーフマン>の命題(Altdorf 1613)は、ヒポクラテス、ガレノス、カエ

サルビーヌス、ワレシウスなどに依拠しており、ウィドゥス・ウィディウス (Vidus Vidius) [イタリアの解剖学者、内科医、1500-69] の文章で終わっている：もし医者が、自分たちが自然の手伝いであるということを知れば、もっと多くの治療ができるだろうに (Medici plures sanarent, si scirent, se Naturae ministris esse)。

<ゼンネルト>はこの問題について彼の著書『ガレノス主義者と逍遙学派の医化学派との異同論』(Tract. de consensu et dissensu Galenicorum et peripateticorum cum chymicis, 第7章)で次のように言明している。Quamdiu vero natura sese morbo, ut hosti opponit, nondum de aegri vita desperandum. Et naturae beneficio omnes crises accidunt, quas medicamentis velle attribuere fatuum est. Quae enim corpus formavit natura, auxit, nutrit, gubernat et quotidie excrementa expellit, eademne tempore morbi otiosa erit? Et cum multae crises ac morborum solutiones fiant nullis adhibitis medicamentis, quae medicamentis velle attribuerentur, quae nulla adhibita fuerunt; neque morborum vel caussarum [ママ] morbificatorum, quae seipsas non expellunt. Ergo reliquum, ut quod hactenus omnium seculorum Philosophi et Medici constanter asseverarunt, adhuc cum Hippocrate, *νοῦσιν φύσις ἀπὸ τοῦ σώματος* naturam morborum medicatricem dicamus。(自然が自ら病に対し敵に対する如く抗している限り、病んだ生命であれ決して望みを捨ててはならぬ。また治療にゆだねるには愚かしいようなあらゆる危機状態 (crises) ですら、自然の恩恵にあずかるのである。というのも身体を形作り、成長させ、養育し、導いていて、日々排泄物を排泄している、その自然が、まさに病のそのときに何もせずにいるということがあろうか? 多くの分利 (crises) や病気の治癒が薬を一切処方しないで生じる時、どのような力でそれらは管理されているのかと私は尋ねる。少なくとも薬の力ではない、というのも薬は処方されなかったからである。同様に病気の力でも病気の原因となるものの力でもない。それらは病気や病因自身を排出しないからだ。したがって、これまであらゆる世紀の哲学者や医者がたえず今なおヒポクラテスとともに確証してきたこと、自然は病気の医者である、という言葉が残る。)——それに関連してここでサントロ (Santorio Santoro) [パドヴァの医学教授で医物理学派の先駆者、1551-1636] の主張にも触れておく。彼は著書『医学静力

学論』(Ars de medicina statica) (Sect. I, aph. 139) において次のように説明している：ベストの時期に貴族たちは薬を服用したがほとんど誰も助からなかった、それに対して貧者のかなりの人々は医者の治療もなくして治った。——プリムローズ (Jac. Primrose) は、<Medicum non facere sanitatem, sed naturam> (De vulgi erroribus, Lib. I, cap. 18) (医者が健康を作るのではなく自然が作るのである、『民衆錯誤論』, 第1巻第18章) と主張している。

外科医の立場から17世紀初頭の傷治療の改革者マガティ (Magati) [イタリアの外科学の改革者といわれる、1579-1648] は、自然の作用について全くバラケルススの意味で述べている。『傷の稀な治療について、ないしは稀に治療される傷について』(De rara medicatione vulnerum seu de vulnibus raro tractandis) のある個所 (第1巻第40章)で次のように言っている：Constitutum est, quod vulnera curat, <naturam esse non medicum, aut medicamenta>; namque si pus movere oporteat, hoc a natura, perficitur, si caro sit generanda, et callo ossa fracta firmanda, haec ejus sunt opera, si agglutinandum, id ea praestat, si excrementa expellenda, hoc est eius munus, et propterea methodus curandorum vulnerum huc spectare debet, ut natura probe munia sua exerceat, et ita cum medicus sit tantummodo minister, illius erunt partes, ut naturae languentis robur adaugeat, et quae ipsam offendere aut impedire possunt, avertat ac removeat. Quare in hoc sita est artis perfectio, ut optime, seu quam melius, fieri possit, egenti naturae succurratur, et qui curandi modus foeliciter hoc praestat, procul dubio potior est indicandus。(傷を癒すものは<自然であり医者でも薬でもない>、と定まっている。つまり、膿を出すのが必要ならば、それらは自然によってなされるのであり、もしも肉をつくり出すのが必要ならば、そして折れた骨の修復に厚皮が必要ならば、それは自然の業であり、膠着が必要ならばそれは自然が成就し、分泌物の排泄が必要ならばそれは自然の任務であり、そしてそのためには傷を癒す方法は、自然が正しく自らの任務を果たすかを観察すべきなのだ。そして医者はただ [自然の] 召使いに過ぎないのだから、医者の持ち分は、自然の弱っている部分に力強さを増大させることである。そして自然そのものを傷つけたり阻止したりできるものを除去したり取り去ったりすることだ。医術の成功はこのことにあるから、医術はせいぜい最善の場合、あるいはよりよい場合、

弱っている自然を〔医術は〕助け、治療法がより幸運にそれを果たしたかを、疑いもなくはっきりと示さねばならない。)

[S. 35] 個々の症例の正確な経過を報告するのが、当時の医学文献の最良の部分形成している。その報告の中で自然治癒力だけで、乃至は主としてそれで、治った注目すべき症例がかなりを占めている。例えば急な発熱や発汗、吐き気や下痢、尿失禁、出血(鼻血、吐血、月経、痔出血)、膿瘍、潰瘍、膿の自潰、発疹*などによって治ったりする。発熱、中でも四日熱**や三日熱、の<浄化作用>を好んで強調する人もおり、それらは自然治癒力の驚嘆すべき現象の一つとみなされた。

* 例えば Donatus, Schenck, Forestus, Amatus Lusitanus らの病歴集参照。ある種の皮膚病に伴うことのある治療効果については特に Hafenerreifer (『皮膚病について』、第16章)。

** 例えば『四日熱贅美』、著者 Gulielmo Insulano Menapio Greubrugensi, Basil. 1542, 参照。

<熱病の治癒効果>に関して少なくともいくつかの重要な引用をしておきたい。ペレイラ (Gomez Pereira) は彼の『アントーニウスの真珠』(Antoniana Margarita) (第2巻第5章) で次のように語っている: Hanc febrem non in alium usum natura gignit, quam ut per ejus vim superflua, quae corpus humanum male afficiunt, diffentur aut concoquantur et concocta per sesibiles corporis meatus patentissimos redditos ob febrilem calorem excernantur et alia naturae humanae incommoda resarciantur. (この熱を自然は次の用い方で増大させる、つまり、自然の力によって、人体を悪化させるような余分なものが溶けてなくなったり消化されたりし、そして消化されたものは発熱の熱で極めて敏感となった身体感覚運動によって識別され、そして人間の自然にとって不都合な他のものも補修されることになるのである。) —ある程度の留保を交えながらアウゲニウス・ホラチウス (Augenius Horatius) は熱病の治療効果について次の如く語っている: Dicebatur, febrem inter morbos esse quid bonum et illius carentiam esse malum. Respondeo, <febrem indicare magnum naturae conatum et pugnam contra materiam morbificam>. Quare febris est signum mali in corpore non levis quia malum est, Naturam ita conflictari et violenter moveri. <Sed tamen praesente causa mala, melius est affici febre quam non febrire>. Oritur febris semper a Natura

tentante expulsionem vel concoctionem. Sed aliud est tentare, aliud, re ipsa expellere et concoquere. Illud indicat conatum, principium, pugnam, hoc absolutionem, victoriam. Sic patet, febrem in se non esse malum, sed tamen occasionem mali. (病気のなかで発熱は何かよきものであり、それが無いのは悪いことだ、と言われていた。私は答える、<発熱は自然の大いなる努力、病毒に対する戦いを意味する>。したがって、発熱は体内の悪しきもの重からざる徴候であるのは、自然がこのように戦い激しく動くのが悪だからである。<悪しき原因が現存しているならば、発熱を起こす方が熱がないよりもよいことである>。発熱は常に排出や消化に努める自然によって生ずる。しかし努めることと排出や消化は別である。前者〔影響を与えること〕は努力、端緒、戦い、を意味し、後者〔排出や消化〕は解決と勝利を意味する。かくて明らかにいえることは、発熱はそれ自体で悪いものではなく、ただ悪しきものの機会となるということである。)

クレヴ公の侍医ソレンデル (Reinerus Solenander) は三日熱は浄化作用を持つというイタリア人の民間信仰に注意を促し、これを鼻風邪の治療効果の信仰になぞらえている。しかし彼は、どうせなら両方ともごめんこうむりたいものだと言っている。: Febris tertiana, si ea exquisita et pura est, tutissima esse solet, ut quae septem circuitibus ut plurimum terminetur. <Hinc fit, quod Itali eam non multum aversantur, quod per istam corpus expurgari credant, quod item nostri homines dicunt, coryzam laborantibus ea salubre esse.> Ego tamen utraque, ut affectibus praeternaturalibus, carere malo. (Consil. medicin. Sect. III, cons. 6) (三日熱は、それが注意深く選ばれた純粋のものであるならば、普通極めて安全なものであり、7日の周期で多くは終わる。<そういうわけで、イタリア人が三日熱をあまり恐れない、三日熱によってからだか浄化されると彼らは考えたので。同様に我国〔ドイツ〕の人々が言うように、三日熱で苦勞すれば鼻カタルがよくなるのだ>。私としては両方とも、超自然的な性格の故に、なしで済ませたいと思う(『医療への助言』第3節第6項)

[S. 36] 17世紀初頭のプリムローズ (Jac. Primrose) (Primerosius) は、春熱は治療効果がある、という<イギリス人の民間信仰*に言及しながらこの問題を詳しく論じている。彼は<マラリアのもつ治療効果を偶然的なもの>とみなし、全面的な価値

を否定している。Populus sententia quadam habet vulgares, quae etsi saepe verae non sint, sed erroneae, sunt tamen considerabiles, quales est haec apud Anglos, febrem intermittentem verno tempore esse Medicinam Rege dignam, insinuant scilicet morbum ejusmodi esse salutarem (<an ague> in the spring is physike for a King). Et equidem febris intermittens solet esse periculo expers. Verno quoque tempore morbi omnes facilius curantur. Sed praeterea cum humores multi pituitosi hyeme congesti et acervati fuerint, vere ex aëris tempore moventur ac funduntur. Quae corpora cacochyma sunt, per accidens in morbos hoc tempore incidunt. Febris autem intermittens si admodum gravis tunc non contingat, ejusmodi humores pituitosos et crassos calore suo et rigore concoquit et excernit. Galenus id dicit de quartana, quam dicit Hippocrates magnos morbos curare, ut epilepsiam, convulsionem, lepram, vitiliginem; rationem reddit, quia horum morborum curatio, coctio est et excretio. Utrumque habet quartana, coctionem, caloris febrilis ratione, ex rigore vero excretionem, quo partes agitantur et humor expellitur. Multo verus id esse potest de febre tertiana, quae salubris est, nec necatione sui lethalis. (De vulgi erroribus Lib. II, cap. 10.) (民衆の間には次のような極めて通俗なことわざがある、それはしばしば正しからず間違っているが、しかし以下は考慮に値する、つまり、イギリスにおいて春の季節に生じる発熱は、王に値する薬である、というのがそれである。すなわち、ある種の病気は健康によいと暗に言っているのである(春の急な発熱[マリア熱]は王にとって薬である)。そして実際間欠熱は危険でないのが普通である。春の季節はあらゆる病気もまたより容易に治る。しかし冬に多くの粘液質を含んだ体液が凝固し積み上げられたときに、まさしく空気の暖かさによって[体液は]動かされ流される。不健康な身体が、偶然にこの時期に病気になる。しかし重い間欠熱がそのとき生じなければ、そのような粘液質で濃い体液をその熱と硬さで消化し排出する。ガレノスは四日熱について同じことを述べているし、ヒポクラテスは四日熱で、てんかん、ひきつけ、らい、白斑などの重病を治すと述べている。それらの病気の治療とは消化であり排出である理由を、[ガレノスは]述べている。熱病の熱の故の消化か、反対に硬直からくる排出か(排出によって体の諸部分が動かされ、体液が排除される)、そのいずれも四日熱は持っている。

る。三日熱に関してはより一層当てはまる、三日熱は健全なものであって、それ自身の故に命に関わるというものではない(『民衆の誤謬について』De vulgi erroribus, 第二巻第10章)。

* 同様の見解はオランダ人においても広く認められる。

一般的な潮流に背を向け、孤独な思想家として生命と病気を考察したのはファン・ヘルモント(van Helmont) [ベルギーの医者、パラケルススに影響を受け、彼と並んで医化学派の祖と見なされる、1579-1644]であり、彼はアリストテレス主義とガレノス主義のもっとも仮借なき批判者の一人であり、自然探求者と神秘家を一身に体現していた。

ヘルモントにとっては、神に由来する「Archeus influus (影響力ある始源者 [体内自然])」とは魂と異なる一つの霊的な原理であり、生体のあらゆる現象の最高の統率者である。体の個々の部分はそれらに内在する生命力、つまり「Archei insiti (植え付けられた始源者たち)」によって動き、その「植え付けられた始源者たち」はある程度独立性はあるが、統一を保持する人格的に構想された「影響力ある始源者」に服している。

病気は外因性の諸要素が体に直接働きかけることで引き起こされるのではなく、「影響力ある始源者(Archeus influus)」乃至は「植え付けられた始源者たち(Archei insiti)」の、病的な考えや変化した気分などに原因があり、素質や遺伝や、あるいは多くの場合外部からの有害な影響によって引き起こされる。外からの悪影響を防ぐために「影響力ある始源者」は、時には直接、時には「植え付けられた始源者たち」を介して、特に熱病の時に現れるような、<異常な>症状を引き起こす、例えば、悪寒、振戦(震え)、発熱、悪臭のある発汗、濁った尿などがそうで、それらはヘルモントによれば、<いわば怒っている「始源者」の武器>として生じるのである。

本質的に発熱は、例えば「血液」(Latex sanguinis)や残留物(Retenta)などの混合異常といった刺激的な影響に対する、防御反応である。[S. 37] <体温上昇は、発熱の本質ではなく、単なる徴候であるに過ぎない>(ヘルモント、『発熱論』、第12章7、第17章3)。かの始源者は自らの防御運動によって、いわば<棘>(spina)のような異物を排除しようとする。この運動は間欠的に生じるが、それは、かの始源者はいわば格闘者のように時折息を継がねばならないからである。: Febris non est nuda caloris tempestas, sed adest vitata quaedam

materia, ad cuius expulsionem Archeus per accidens se accendit, velut indignatus. Incendit nimirum se ipsum Archeus in nisu, quo cuperet expellere materiam occasionalem, tanquam impactam sibi spinam... Etenim qui in lucta spiriosus succubuit, aliquantisper quiescit et anhelitum recuperat, perque moram vires refarcit, quibus incumbentem victorem excutiat. Sic naturali ductu univoco, Archeus in febris sibi quietes imperat, ac deinde resumtis viribus et vicibus, hostem nititur excutere. (発熱はただ体温の異常というだけではない。体内の何らかの物質の劣化があって、それを排出するため始源者〔体内自然〕が時に応じてあたかも怒れるものの如く自らを燃焼するのである。始源者が、病因となる体内に入った刺のような物質を排出しようと努める中で、自らを燃焼するのに何の不思議もない。…病と争って息も絶え絶えに横たわっていたものが、しばらく休息し呼吸を回復してしばらくすると、倒れ伏している勝者〔侵入者〕を排出する力を回復する。かくて自然の一義的な指導の下で、始源者は熱病において自らに休息を命じ、さらにその後体力と幸運を取り戻して敵を追い出そうとする。)

発熱患者の振戦や悪寒期の血管収縮は〔異物との〕戦いを意味している。この戦いの効果がなければ、つまり異物がふるえによって排除されなければ、かの始源者は Blas alterativum [体質改善のための神秘的な力。Blas とはヘルモントの用語で、中期英語 blast (一陣の風) に由来し、身体の様々の反応を統轄し支配する神秘的な精神力や生命力のこと。ステッドマン医学大辞典、第5版、及び OED, 1970, 参照] を刺激し、濁った尿や臭い汗を出して敵を排除する。: Intendit Archeus per tremulos rigores excutere adhaerens parti similari excrementum ... Sed Archeus advertens se per rigores parum proficere, Blas alterativum excitat... Tandem igitur cum Archeus per venarum et arteriarum obliquam contracturam, perque musculorum trepidationes, se nihil proficere advertit... Turbidae ideo atque cofusae urinae... Tandem itaque velut iratus Archeus, se ipsum accendit propria thymosi hostemque adoritur, aestuat, olidumque tandem sudorem profundit, non alio fine, quam ut expellat hostem (de febr. cap. 9) (始源者〔体内自然〕はふるえる寒さで類似の部分に固着しながら、分泌物を排除しようとする。…始源者は寒さによっては十分に自らの利益とならないことに気づき、Blas alterativum を刺激する。…そ

してついに始源者〔体内自然〕が静脈と動脈の斜めの収縮によって、また筋肉の振動によって、自ら何の役に立たないことに気がつく。…そのため濁って混濁した尿。…そしてついに怒れる如く始源者〔体内自然〕は、自らを燃焼して、自身の胸腺〔?〕で、敵を攻撃し、発熱し、臭いのある汗を出す、それは他でもなく敵を排除するためである(『発熱論』第9章))。

発熱を有害物に対する生命原理の本能的な戦いであると見るヘルモントの見方や、総じて彼の病気観は、哲学者<カンパネラ> (Th. Campanella) [イタリヤの哲学者、『太陽の都』(1623)の著者, 1568-1639] の発熱理論や病理学と非常に類似したものであった。同時代の人々の意見によれば、ヘルモントはパラケルススにつながると同時に、カンパネラの強い影響下に立っていた。<カンパネラ>は<発熱を自然治癒力の極めて重要な道具>とみなし、発熱を抑える試みを端的に患者に害を及ぼす行為だと言明した。彼は自然の病気に対する戦いを叙述し、その戦いを様々な発熱症状において劇的に展開した。戦争はどんなものも自らの領土に悪影響を及ぼさざるを得ないように、発熱もまた、好まれからざる、威嚇的な、症状を伴わざるを得ない。

<Arbitramur, febrem non esse morbum, sed bellum contra morbum>, potestiva vi spiritus initum, <nec melius remedium a natura datum esse animantibus, ut ad sanitatem perveniant>, sicuti neque civitatibus, cum impugnantur, ut ad suam tranquillam redeant conservatonem, quid melius bello non inventum est, ubi persuasiones precesque non valent. <Manifestum, est enim, quod omnes morbi superveniente febre curantur, qui autem non febricitant, ubi est opus, morbe vincuntur et pereunt... Igitur errant putantes, febrem esse malum, licet ejus causa sit mala. Qui autem procurant, ut febris cesset, mortem procurant totius vel laesi membri>. (<我々は考えるに、発熱は病気ではなく、霊〔呼吸〕の強力な力であり込んだ病気に対する戦いであって>, <健康になるため、自然によって魂あるものに与えられたこれ以上の薬はない>, たとえば國に対して、われわれが襲撃されるときに、國の平穩に保護を復讐させるために、説得と懇願が有効でないときには、戦争よりもよいものはないように。<それゆえあらゆる病気はそれに伴う発熱で治されるということは明らかであり、他方熱を発しない人々は病気に負けて死ぬということも当然である。それゆえ、たとえ発熱の原因が悪

しきものであるとしても、発熱は悪しきものであると思っている人々は間違っているのである。それに反して発熱を終わらせようと配慮する人々は、全身ないしは傷ついた部分の死を招くことになるのである。)

[S. 38] Febris ergo sit spontanea extraordinaria spiritus agitatio, inflammatioque ad pugnam contra irritantem morbificam causam, quam calefacit, agit, digeritque, redditque expulsine aptam, vel extinctioni, vel meliorationi. (それゆえ発熱は魂〔呼吸〕の自発的で特別な運動であり、刺激し病気を引き起こす原因に対する戦いのための燃焼である、他方でこの原因を〔熱は〕温めたり、追い立てたり、消化したり、排泄によってなくなったりよくなりして適当な原因にもどす)。

<Ex his deducitur, nullam febrem esse morbum, sed remedium contra morbos>, ergo nullam febrem esse essentialem, sed omnem symptomaticam, nec differre febres nisi periculi ratione, quale enim, quantum et ubi et quando est periculum, talis, tantus et ibi et tunc est fervor, spiritus, i. e. febris. Ergo nulla per se febris est simplex aut putrida aut pestilens, sed causa vel morbus spiritum infestans est simplex aut putrens aut pestilens. (Medicinalia juxta propria principia lib. VII, cap. 1, artic. II ; cap. 2, artic. 1) (<以上のことから引き出せることは、発熱は全く病気でなく、病気に対する薬である>, それゆえ発熱は本質としてではなく全て徴候として理解されるべきであり、発熱は危険の原因と異なるところなく、それゆえどのように、どれだけ、どこでいつ危険があるかは、炎、魂〔呼吸〕、つまり発熱がどのように、どれだけ、どこに、いつあるかで分かる。それゆえそれ自体として発熱は単純であるとか腐敗しているとか破壊的だとかというのではなく、魂を傷つける原因ないし病気が単純で腐敗しており破壊的なのである。〔『特定の原理に基づく医学』、第7巻第1章第2項；第2巻第1項〕

Imo quando putredo aut fuligo intra corpus generatur, aut cruditas, ipse spiritus pulsum efficit calidiorem, grandiolem, velociorem et frequentiolem, quo possit humorem molestum attenuando expellere aliudve noxium, veluti in febre accidit. Quae nimirum est <fervor accensioque spiritus contra malum pugnantis>. Eaque ratione bona est febris, qua <bellum>, remediumque postremum. (Physiologia epilogistica, cap. X, art. 6) (確かに腐敗や煤ないし

不消化が体の中のできる時、魂自身が脈拍をより熱く、より大きく、より速くより頻繁にし、そのことで体液がより薄くなってやっかいな有害物を排除することができ、いわば熱となっていく。確かに発熱は、害毒と闘う霊の炎であり燃焼である。かくて十分な理由でその発熱は、良きものであり、最終的には薬である。〔『推論の生理学』、第10章第6項〕ヘルモントの「憤激した始源者」という表現を想起させるのは特に次の文章である：<Febris enim est ira interior>, id est <fervor spiritus accensi>. (L.c. cap. XII, art. 4) (<すなわち熱は内なる怒りであり>, <熱せられた霊の炎である>。前掲書第10章第4項)。生体が病氣と闘うときに生じる悪しき随伴症状は、自国に生ずる戦争の帰結に、ありありとならえられている。：Multae laesiones fiunt in spiritu et in aliis corporis partibus ex pugna contra morbum, Qui enim in propria domo et civitate bellum gerunt, accipiunt vulnera et minuunt viribus, item ipsorum domus et civitas multis affligitur damnis tum a bello illatis et commissis, tum ab omissis functionibus ad gubernatum pertinentibus. Nec enim agricultura exercetur, nec forum, nec gymnasia tempore belli, nec ceterae artes utiles ad vitam... (多くの外傷は魂と体の他の部分において病気に対する戦いから生じる。それゆえ自分の郷里や自分の国で戦争を行うものは、傷を負い力を減じ、自分たちの家や国が一方で戦いに全てをかけて、他方では調整するための機能がおろそかになって、数多くの損害をこうむる。それゆえ戦争の時には、土地の耕作も、市場も、体育場も、また生活に役立つ他の技芸も、行われぬ。…) [ここまでカンパネラ]

ヘルモントによれば炎症とは神経の病気で自然が治ろうと努力している現れであり、痙攣も彼によれば憤っているかの始源者〔体内自然〕の全く目的に合わない防衛運動である (de virt. magna verborum [ママ] ac rerum) [言葉と物の大いなる力について]。

「始源者」は時には単独で癒すこともできるが、しかしいつもそうとは限らない。興奮して废物の如く支配するかの始源者は、時には性急な防衛反応をとって自らの目的を逸してしまうことがある。そんなときには医術の助けが必要であり、医術は体力の一般的状态に(食餌や衛生の面で)配慮し、時には穏和なやり方で排出を促進し、しかしまた<力動的な>「秘薬」によって「始源者」の興奮を鎮め気分を変えなければならない。

厳密に言えばヘルモントにおいては「始源者」という生命の原則と「自然」とは同じではない。

彼はヒポクラテスの「自然は病気の医者である」という指導原理を認めてはいるが、自然の作用領域は彼によればやはり限られたものであり、<医者はそれゆえ必ずしも「召使い」(minister)の役割に甘んじることはできず>、「仲介者、命令者、権能者」(interpres, rector, et herus praepotens)として積極的に介入せねばならない。待機的な治療はヒポクラテスの時代にはふさわしかったかも知れないが、後世においては十分な妥当性をもはや持っていない。かくて彼は例えばせん妄性カタル論 *Catarhi deliramenta* において次のように述べている：1. *Naturae ipsae sunt morborum medicatrices, Medicius autem illarum minister, juxta Hippocratem. Sed id de morbis, quos Natura curat. sponte sua. At ubi succubuit, ut suis resurgere viribus nequeat, Medicus a Domini benignitate electus... <manet non amplius minister, sed interpres, rector et herus praepotens... Seculo enim Hippocratis universales medendi apices, quae naturae tonum in se continent, nondum enotuerant; veniam ergo Hippocrates meretur, si totum morbi negotium per naturam, ut magistram, absolvi putarit>.* (1. ヒポクラテスによれば、自然は自ら病気の医者であり、医者はしかし自然の召使いである。しかしそのことは、自然が自分の自由意志で治す病気について当てはまる。しかし「自然が」倒れて自らの力で立ち上がれない時には、医者は神の恵みによって選ばれ、…<召使いにとどまらず、それ以上に仲介者、命令者、権能者となる。…かくてヒポクラテスの時代は一般的な医の王冠は、自然という色調を自らに負いながら、まだ公にはなっていない。それゆえヒポクラテスこそその名に値する、もしも病気の処置全てを指導者としての自然によってなされると考えたとしたならば>。)

[S. 39] 同様に『未知の客・病気』(*Ignotus hospes morbus*), 90, においてヘルモントは次のように述べている：Porro Hippocrates medicum vult naturae duntaxat ministrum, naturans autem sui solius medicatrices. Idque suo sic seculo jussit. Alioqui naturae jacentis est <medicus patronus atque herus>. Qualem si senex nondum agnoverat, multo certe minus schola ethnica postera in hunc usque diem. (そしてヒポクラテスは医者がせいぜい自然の召使いであり、自然は唯一自らの治療者であると考えている。そのことを「ヒポクラテス」はその時代に命

じた。さらにいえば<医者は>横たわる自然の<庇護者ないし主人>である。老人 [=ヒポクラテス?] がまだどんなことを知らなかったとしても、ずっと確かなことは、後の世の諸民族の学校がもっと知らないということは今日に至るまでそうなのだ。——もとより彼(ヘルモント)は、自然の治療過程に対立しないように注意しているし、薬剤の効果は補助的なものとみなしている。例えば『体液論学派の人々の乱雑な欺瞞と無知』(*Scholarum humoristarum passiva deceptio atque ignorantia*), 第1章, 7, において次のように述べている：<Remedia scilicet morbum tollere> non vi contrarietatis ut neque propter nudam similitudinem; sed <proptermerum bonitatis donum restaurans naturam adjuvando, quae alioqui sui ipsius est medicatrix>. (<治療すなわち病いを取り去ること>は、反対性質を持った力によってでもなく、したがってまた類似性質だけの故でもなく、<善なる性質のものの単なる供与によって自然を助けながら回復することである。言いかえると、自然は自分自らの治療者なのである>。) 同章, 8 <Naturam esse morborum medicatricem, eam confortandam ideo, non consternandam>. (自然はさまざまの病気の治療者であり、それ故に自然を強めるべきであって、覆い隠すべきではないのである。)

同様に、熱を除くのが主として適合する「秘薬」であるとしても、害物(*Materia peccans* 罪ある物質)を排除して病気を癒すことは、自然に委ねなければならない。Tract. de febribus, cap. XVII, 8 : *Hac scilicet via, statim febres cedunt, ad appulsum alicujus Arcani, residuum autem expulsionis, committitur humeris [ママ] naturae, ut sua servetur Hippocrati dignitas. Quod ipsae naturae sint morborum medicatrices.* (『発熱論』第17章第8節。すなわちこういうやり方ですぐに発熱は治まる。何らかの秘薬を排除し、排泄の残余は自然の体液に委ねられ、ヒポクラテスの権威がまさに保たれることになる。すなわち自然そのものが諸々の病気の治療者であるということだ。)

ヘルモントは強力な下剤や瀉血の濫用を退け、<分利>を必ずしも不可欠とはみならず、分利をむしろ「秘薬」によって予防し、そのことによって病気の過程を穏和なものにしようとした。

Bonus autem Medicus negligere crises debet... Nam natura crisin non facit, nisidum sola totum onus bajulat, statis diebus. Verus ergo Medicus ante crisin morbum superare debet; ideoque nec crisin expectat,

nec optat (de febr. cap. XI, 18). (ところで良き医者は分利〔危機〕を無視すべきである。…というのは、自然だけが全責任を担っている場合を除いて、一定の日に、自然が分利を生むわけではないからである。したがって真の医者は分利以前に病を打倒すべきなのである。したがってまた分利を予期すべきでも、望むべきでもない(『発熱論』, 第11章, 18).)

かくてヘルモントの場合、自然治癒力に関するヒポクラテスの理解とのずれがあり、それは必ずしも些少な程度ではない。そのことは既に、「立っている自然」(natura stans), 「座っている自然」(natura sedens), 「横たわっている自然」(natura jacens) という概念を立てたことに見て取れる。それらはいづれも自己救済だけでやっつけられる症例*と、医者が自然の召使いとして自然を支えながら働かねばならない例と、医術(秘薬療法)だけが治癒をもたらすことができる例とを、区別しているのである。同様に重要なことは、ヘルモントは<「自然」の働き>を<固定的なもの、強制的なもの>とみなしており、彼の敬虔な信仰心に対応して、自然は独立性を一切持たないとした: *Ego vero credo, Naturam jussum Dei, quo res est, quod est, et agit, quod agere jussa est. (Physica Arist. et Gal. ignora.)* (まこと私の信ずるところでは、自然とは、存在する事物がどこにあるべきかという神の命令なのであり、なすべしと命ぜられたことをなすのである。)(『アリストテレスとガレノスの知られざる自然学』)。

* そのような症例には彼〔ヘルモント〕の辛らつな言葉が当てはまる: <Omnes academiarum potestates connexae tantum non faciunt, quam Natura sponte sua absque illis facit et peragit> (〈あちこちのアカデミーのすべての権威が一致団結しても、自然が自力で彼らの協力などなしで成し遂げるほどのことも、なしえないのである。〉)。

[S. 40] ヘルモントの根本的な考え方は、神秘的な装いをまとい時には矛盾をはらんでいたもので、後世になって新しい装いのもとで復活を遂げることとなった。同時代の医者たちの多くにはほとんど影響を与えなかった*。自然科学的に明晰な考え方が普及し、機械論的な精神で営まれた研究が凱歌を奏するようにになった時代には、わずかに臨床で冷静な観察だけが証明力を提示できた。考察すべき多数の著作家**の中で特に<トゥルピウス> (Tulpius) [アムステルダムの解剖学者、脚気を最初に既述した、1564-1617] を取り上げることにしたい***。

* ヘルモントの「始源者」に対応するのはヴェッパー

(Wepfer) [スイスの臨床医、脳卒中が脳実質内の出血であることを屍体解剖で明らかにした、1620-95] の「保護者」(Praeses) (cicut. aquat hist. [?]) とドラエンス(Dolaens) の Gasteranax, Cardimelech, Microcosmator (小主宰者) (『医学全書』Encycloped. medic.) である。

** すなわちバルトリン (Thom. Bartholin) [バルトリーニウス, 前出], エットミュラー (Ettmueller), ファブリ (Fabry von Hilden) [17世紀のもっとも有名な外科医、1560-1634], ホルスト (Gregor Horst), ロッシウス (Lossius), ペッチリン (Pechlin), ローディウス (Rhodius), リヴェリウス (Riverius) [フランスのモンペリエからでた新ガレノス主義者、1589-1655], ザルムート (Salmuth), ツァークトウス (Zacutus Lusitanus) であり、彼らの症例観察によれば、自然治癒が生じるのは嘔吐、下痢、発汗、鼻血、痔出血、潰瘍化、膿瘍、発疹などによってである。<代償的な>鼻血、吐血などに言及しているのは興味深い。Santorio 以来不感蒸散 (Perspiratio insensibilis) も自然救済の一つのあり方とみなされている。リヴェリウス (Rivière, Riverius) は例えば子宮出血における失神も自然救済とみなした。

*** ツルピウスの医学上の観察は、17世紀の医学文献の中でもっとも価値あるものに属し、また外科学と病理解剖学への重要な寄与を含んでいる。そのトゥルピウスはヒポクラテスのあらゆる長所の中で自然治癒力の強調こそが最大の長所であるとみなしている。: *Plurima non minus graviter, quam vere dixit uberimus auctor Hippocrates, sed nihil majestate ipsius dignus, quam ingenuum illud, Naturae morbis medentur cujus effati dignitatem ut passim omnes, sic ostendit praecipue <morbus comitialis>, quem eradicaum ubi vult natura, utitur modo, variantis aetatis, mutatione; modo vero <ulceribus> in capite excitatis; vel excogitans aliud aliquod solers inventum, dissolvit industrie nodum, arti medicae plane indissolubilem...* (学殖豊かな著者ヒポクラテスが語ったことに劣らず重要なことからは数多くあるが、の内なるもの以上にめざましいものはない。すなわち諸自然はもろもろの病いを癒すというあの言葉の権威であるが、それはあらゆる病いであれこれ示されるが、特にてんかん性の病いが示すところで、この病いは自然が望めば完治するもので、年齢に応じて変化を利用することもあれば、頭部の外傷を利用する場合もある。あるいはまた [このうちなる自然は] 何か他の巧みな手段を考案出して、医術には全く見つけなかった結び目を細心の注意でほどいてしまう…。)

En praecentem naturam, ô Chirurge; monstrat ipsa, quasi digito, salutarem inustorum <ulcerum> usum; ex fama tua erit, imo ex usu aegrorum, si hanc sequaris ducem. Prosumt ulcera in arthritide, expellunt lippitudinem, sed neminem efficacius juvant quam morbo comitiali obsessos. (Observationes medicae, Lib. I, cap. 8) (導き行く自然に注目せよ、外科医諸子よ。自然はたなごころを示すごとく、やけどの外傷の健全な処方を示している。この導き手に従うとすれば病いの処方から汝の名声があることとなろう。外傷は関節炎に有効であり、かすみ目[感冒?]を追い出すが、てんかん性の病いに冒された者で有効に救われる者はいない。(『医学的観察録』, 第1巻第8章)。別の病歴では次の通り。Cornelius Tector,

vir pleni habitus, excarnificatus aliquandiu ab intolerabili capitis dolore, controquebatur tandem tam vehementer a contractione nervorum, ut nihil proficiente arte medica, necesse fuerit implorare naturae opem; quae etiam tam sedulas tulit supplicatas, ut <pulso per nares plurimo pure>, brevi libraverit hominem, non tantum a dolore, verum etiam a pertinaci, horribilis illius convulsionis, causa...
 Quod ipsum, benignae naturae, auxilium etiam aliis vidimus allatum, cum <per porriginem>, tum per vermes a naribus excretos... <Discant hinc medici naturam imitari> et observare cum iudicio; quantopere in capitis dolore ex usu sint, cum sternutamenta, in tempore mota, tum ulcera, capiti mature inusta : <natura quippe dux optima; nec facile errat, ipsius, qui insistit vestigiis>. Illa flante prospere navigat aeger et interdum ipsa duce incredibilia peragit medicus. (Ibid. cap. 32) (Cornelius Tector は資産家であったが、ある時頭部の増えがたい痛みによって責めさいな

められ、ついに筋肉の収縮によって極度にねじ曲がり、医術でも何の効果も得られず、自然の〔治癒〕力を懇願する必要に迫られた。自然は確かに熱心な援助を行って、鼻から大量の膿が排泄され、苦痛からのみならずかの恐るべきひきつけのしつこい原因から、短期間の間にその人を解放した。…すなわち慈しみ深い自然の援助そのものが、他の場合にももたらされたことが分かるが、たとえばふけによってか、または鼻から虫が排出されることで…。<この場合も医者たちは自然を模倣することを学ぶ>、そして判断力を持って観察することを。頭痛の場合どれほど有効か、すなわち適当な時期のくしゃみや、適時の頭痛ややけどのように。<自然は確かに最良の導き手であって容易に誤ることなく、その後に従う者の指導者である>。自然の風が吹き付けるとき病いは順調に航海し、また自然が導く場合、医者はいよいよ信じがたいことを成し遂げる者である。) (前掲書、32章)

**Max Neuburger: Die Lehre von der Heilkraft der Natur, 1926,
 Kap. 2, Sekt. 1, translated by Hiroshi Hosomi**

Hosomi Hiroshi